

## 「文系」と「理系」

ある日、私の研究仲間のドイツの教授からこの絵中の左端の文の意味を知りたいというメールが来ました。ファイル名に Utagawa Hiroshige とありましたので、絵の作者は、歌川広重と分かります。さて、問題の文ですが、何て書いてあるか分かりますか？



私は全く分かりません。このドイツ人は「松野は日本人だから分かるだろう」と気楽に聞いてきたのでしょうか。困りました。自己解決は無理なので、人文学部の先生\*に尋ねてみたところ、ここには

**「大木(たいぼく)や はつれ々(外れ外れ)は 若(わか)かへて(楓)」**

と書いてあり、芭蕉門の俳人である山店の句とのことでした。私の知らない遠い世界から、助け舟が来たような気がしました。しかし、それだけではありません。

「大木」というのは、大きくなるまで成長した木のことでですから、「長い時間」「おじいさんのような古さ」を象徴していると思われます。絵に描かれているフクロウも、それを補足する景物なのではないでしょうか。しかし、その「おじいさんの木」も、端の端の方に伸びている枝先には「若い楓」が芽吹いていて、「大木」と「若楓」という対極の時間的コントラストが一本の木によって体現されていることがわかります。

これには完全にやられました。数式や記号ばかり扱ってきた「理系」人間の私には、このように感性豊かで、人の心を動かすような解説はできません。改めて「文系」の力を実感し、人生を半分以上損したような気持ちになりました。

最近、大学の教育や研究では「文理融合」が重要視されています。科学技術が急速に発展する一方で、「人間とはなにか、どう生きるべきか」という古くからの問いに立ち返ること、すなわち「文系」的見方の大切さが再認識されてきたのでしょうか。

ご来場の中高生のみなさんは、今日はサイエンスワールドで「理系」を目いっぱい楽しんでください。でも私のように人生を損ないように、学校では「文系」も「理系」も一生懸命勉強して、バランスのいい社会人になってください。

山口大学理学部長 松野浩嗣

\*人文学部の下善正利先生のご協力と、森野正弘先生、尾崎千佳先生からのご指導を受けました。ここに記して感謝申し上げます。